

と、草薙金四郎氏もその著書に書いているが、松岡氏のこの日誌を見ると、一層その感が深くなる。岩石が流下するにつれて磨かれ円礫になるのは当然だが、とくに均質な砂岩の特性として他の火成岩や変成岩と違って丸味を帯び易いもので、讃岐にはこの砂岩の円礫が多い。ご神体を一つ一つおがんだわけではないが、私はお国柄として、ご神体の円石は疑う余地もなく和泉砂岩と断定せざるを得ないのである。

## 十七 由良石

皇居の前広場の敷石として、この石が出されたのは人の知るところである。今は高松市になった、もとの川島町―そのすぐ北に独立した小円頂丘の山がある。これが由良山といわれ、由良石の出る山だ。

山の北側と南側に、採石のあとが、柱状節理を示し、山上と山下に繁る松の緑―その中間に岩石が断崖となっていて、誰の目にも、すぐ採石場であることがわ

かる。

岩質は安山岩だが、角閃石や雲母や斜長石の班晶が肉眼的にもよく見分けられ、誰の目にも閃雲安山岩であることがすぐわかる。

安山岩としては、その粒度は大きいのが、恰も細粒の花崗岩や花崗閃緑岩に似ているので細目の庵治石にも劣らぬ稚味がある。

そんなことからか、かつては京阪神方面で紫雲石といわれて建築用によるこばれたという。

この由良山での採石のはじまりはわからないが、由良遠江守兼光という戦国武士の城址なので、勿論藩政時代にはいつてからではあるろうが、柱状節理の崩された採石場の状況や、高松近在によく見かける由良石の加工造営物や墓石などの密度や分布の工合から見て、おそらく二、三百年以上の採石の歴史はあると推測せられる。

私は採石ブームの景気のよい頃、ある建設業者が、「あの山の持主は高価な値

段で採石業者に打った、あんな小さな山だが、えらいもうけだそうだ。…」とうらやましそうに話をしていたのを聞いたことがある。最近、由良山の石材組合事務所の話では「山は高松市林町（飛行場のある町）の真鍋氏の所有で、それを十軒の採石業者が借地して、現在、石材の採取をやっているが、近頃は不景気で困る。庵治石に較べて値段も安いし、皇居の敷石に出した頃はよかったが、今では品質の良いものが少なくなった。

近頃は、もう県外には出していない。県内それもごく近くで、国分寺あたりへ出しています。加工も灯ろう作りぐらいで、そのあとは石垣石や鉄平石の代用にするといったところ……」

という話であった。

不景気になった様子で、組合の事務所にも女の事務員がただ一人、机に寄りかかっていた。